

の研究に精進していた先生に、白羽の矢をたて本学への転任方を懇願すること再三、やつと快諾を得たその時の私の安堵と喜悦の程は今尚嬉しい思い出である。

先生は、その筆蹟の示すが如く頗る凡帳面で、責任感の強い人であつた。10年に近い同僚生活の間、互に深く信頼し互によく協力しあつて、唯の一度も感情の綻れを微塵だに覚えなかつたのは、先生の人柄の然からしめるところであつたと、敬意の念と感謝の情を禁ずることができませぬ。

先生は、本学開学の当初から、英語、英文学の講義を担当せられたが、「英詩の鑑賞」の講義は先生の得意とするところで、その蘊蓄を傾け懇切丁寧、かつ巧緻精細、批判もあり、感慨もあり、教訓もあつて、学生を静かなる喜びに或は深き瞑想に導き、尽きざる心の饒を楽しませると同時に、学生に英詩鑑賞の態度を養つて下さつたのである。先生は、文芸と社会が密接な今日では、文芸を根本から研究してその真精神を顕現せねばならぬところから、浅薄なチャーリズムに囚われたり、又羊頭狗肉的なところがあつてはならぬと信じ、文芸を熱愛し研究せんとする学生の木鐸として、真摯に進まんとする文学に対する態度と信念を堅持していたと、忖度することができる。

先生は、また、和歌に堪能で、若い頃からの自作の珠玉は約二千にも及び、これらをまとめ歌集として世に出すつもりであつたのに、遂に存命中世に出ることなく笈底に収められたままとなつていたのは遺憾であつたが、この度先生の同僚、朋友、女大卒業生などの有志の方々の発起で、歌集となつて世に出る運びに至つたことは、誠に喜ばしいことで、先生の御霊も嘸かし御満悦のことであろう。

先生は赴任の当時は健康で、テニスを好み、職員同士の場合には、先生が後衛私が前衛で出場した楽しい思い出もある。ところが、先生は計らずも健康を害し、長きに亘り静養に専念する身となつた。しかし、その後、健康が回復して再び教壇に立つこととなり、河瀬先生退職後は英文科主任、図書館長として学生の指導に、本学発展のために、愈々大いに為すところあらうとした時、忽然として逝去せられたことは、本学にとつて一大損失といわねばならぬ。ありし日の先生を追慕して誠に痛惜の情にたえませぬ。

中 島 源 次 教 授 を 憶 う

後 藤 武 士

故中島源次教授と私との交友は昭和初期の学生時代からであるが、卒業後はそれぞれ任地を異にしていたため、終戦後教授が女子大にこられるまでの間は、おたがい年賀状のやりとり位で殆んど顔を見ない長い年月が続いた。福岡へこられてからのことは誰もまだ記憶にあらたなところであろうから、私は遠い昔の学生時代の思い出をたどつてみることにする。九大に英文学の講座が創設されたのは大正14年のことで、最初の専攻学生は私を入れて10名で、それから毎年ほぼそれ位の学生が入つてきたと記憶する。中島氏は私より1

年遅れて入学したが同じ講義を聴き、同じ演習に出る時間が多かつたので、その真摯な勉強振りと誠実な人柄が30余年を経た今でも昨日のここのように強く印象に残っている。創設当初の法文学部は東大の美濃部博士を部長として、ヨーロッパの大学の制度を取り入れ、学生に専攻学科にのみとらわれない、はばの広い教養を身につけさせようと、法、文、経のどの講義でも自由に聴かせるという方針であつた。従つて私たち文科の学生でも法、経の教室に勝手に出入できるばかりでなく、その中から4単位をとらなければならない規則であつた。おかげで民法の試験を受けてひどい目にあつたことを覚えている。その法、経の方では昨年定年で退官された向坂先生をはじめ、佐々、石浜などまだ二十代の若い新進気鋭の学者が熱のある講義で学生の人気をあつめており、私など文科の学生は高田保馬教授の雄弁にひかれたりしていた。

さて我々の専攻の英文学の講義が始まつたのは主任教授豊田実先生がイギリスから帰られた14年の秋からであつた。他に五高から河瀬先生、福高から本多顕彰先生、佐高からイギリス人教師が講師として見えて居られた。一方その頃の学生の方はというと高等学校からきた若い連中と、高師や外語など専門学校からきた者と二種に大別される。後者の方とはとにかく英文学を一通りやつてきた連中で、中には数年教壇に立つた経験をもつ者もあり、今から思えば随分大人びていた人もあつた。然しいずれにせよ当時の文科の学生は誰も文学をやることに生き甲斐を感じ、生涯をそれに打ち込む意気込みを持つていたと思う。然るに当時帝大と称せられた4大学のアカデミックな学風は必らずしもこのような学生を十分に満足させるものではなかつた。そして創設の九大の英文学教授候補に芥川竜之介が上つているという噂がかねてからひろまつていたので芥川教授の実現に期待を寄せていた学生の中には一種の失望と不満を訴える者も居たようである。（それから2年後芥川が自殺したことが当時の学生に多大の衝撃を与えたことはいうまでもない。）然し今から回顧してみれば当時の学生の漠然たる不満と文学青年の漠然たる憂愁との間に一線を劃することは困難なようである。現に学生の間には大学の講義はやはりしつかりした語学の素養の上に立つて、じみに文学の正確で深い解釈を築いてゆく行き方をとるべきであるという者と、いや文学の講義は教師がすばらしいアイディアを思いついた瞬間「おい皆集れ」と言つてそれを示してくれる行き方でなければならぬなど、前庭の芝生にねそべつて気焰を吐く者もあつた。当時は未だ今日のように英語学をやる者と文学をやる者との間に判然たる壁は無かつたが、それでもこつこつ語学的にやる者と、文学青年型とが自ら分れ、後者の中には創作の方に相当精力を注ぐ者もいた。中島氏は後者の型で実際に創作面に最も活躍した人であつた。後年は主として短歌へ移つたが、当時は戯曲と詩に精進していた。文芸雑誌「筑紫」が発刊されたのもその頃で、私も下手な詩を寄稿したが中島氏の戯曲が光つていたようである。中島氏と同級に、後に研究社に入つて新英和大辞典の執筆者として活躍したS君がいた。このS君と中島氏とは奇妙な交友関係にあつた。同じ下宿にいた二人は食事と一緒にだし、講義も一緒にきき、休みの時も一緒に終日離れたことがない親しい間柄であつた。然し二人が一緒に居る時、近ずいて行つた者は不思議な二人の関係を見せつけられたものである。つまり二人は始終口論していたのである。「君この人物はここに登

場させてはいけないよ、もつと後の幕に出すべきだ」とS君が、中島氏の近作の戯曲を酷評するのである。すると中島氏はムッとして、例の低い声でこれに応酬する。こういつた論争が夜床に入つた時まで続くのである。夜中でも二人は枕を並べて尽きることのない文学論争に花を咲かせたものである。この仲が悪いようで仲のよかつた奇妙な関係は文科学生たちの間ではほえましい逸話となつていた。中島氏は友達に対し実に誠実で親切な学生であつた。氏は浪漫派の詩人の作品を根気よく読んでいたが、解釈で満足する読み方ではなかつた。自己の創作の体験からして、詩人の創作心理程まで深く掘り下げねば気がすまないという風であつた。英詩というものはつくづくむつかしいものと思う。外国人であるわれわれが果してどの辺まで味わい得るものか、その限度を思う度に私など悲観せざるを得ない。教師として学生に教える講義のために、インフォメーションを集めることはさして困難ではないが、いくらインフォメーションを積んだからとて詩の本質をつかんだとはいえない。一篇の詩についていくら論をつくしても、その詩の本尊をとらえているとはかぎらない。じみな中島教授は所謂論文なるものを派手に発表する型の人ではなかつた。私も教授の論文をあまり拝見していない。然し学生時代から詩や短歌の創作に精進してきただけに、教授の詩に対する研究の境地は後年ますます冴え、かつ深く沈潜して、詩心の殿堂の奥深くへ進まれたことは、静かに語る片言隻句からも、容易に想像し得るところであつた。

晩年は不幸にして半ば闘病の生活であつた。しかし苦しい闘病の体験は枯淡高雅な人柄を更に一層美しく磨いたようである。私は時折女子大に出講した帰途など千早のアパートに訪れるのを楽しみとしていた。海岸からの清風をうけて明窓浄几、書斎は塵一つとどめていない。奥様と御二人きりの静かな日常がしのばれて羨しいほどであつた。女子大の卒業生代表の弔詞の中に、或時は妹の如く、恋人の如く、と御二人の仲を評したことばがあつたが、御子さんたちが皆成人されて夫婦御二人の生活はまさにその通りであつた。

その日は丁度女子大に出講の日であつたので、私は何も知らずに天神町から門司行きのバスに乗り込んだ。すると下條先生と一緒に、中島さんが亡くなられたのを知っているか、と言われ、余りのことに茫然となつたのであつた。かけつけたなきがらの枕頭にヴァリオラム版のシェイクスピアのソネット2巻の脊文字が静かに光を投げていた。 ●

中島先生の思い出

千々岩好子

私が中島源次先生のお名前を知つたのは、歌誌「台湾」が発刊され、野田廉雄氏のお誘いを受けて入会させて頂いてからであつたから、昭和15年、台北市での事である。歌誌「台湾」は台湾での短歌の総合雑誌の立場をとつていたので、いろいろな系統に属する歌人の名前が見え、丁度歌人の誌上交歓場の様な感があつた。野田さんは「ひのくに」、国川雄